

プラテュス *πλατύς*



- ◆巻頭言 医学部保健学科／大学院保健科学院・保健科学研究院のこれから 1
大学院保健科学研究院 研究院長補佐 宮本 顯二

- ◆研究室紹介 生活機能学分野 神経心理学・高次脳機能障害学研究グループ 2
生活機能学分野 准教授 境 信哉

- ◆寄附分野紹介 北斗関節機能障害予防学分野 3
兼任教授 武田 直樹・山中 正紀 特任助教 小林 巧

- ◆海外便り 南太平洋ソロモン諸島でのフィールド調査 -自分の目で見ることの大切さ- 4
保健科学コース 修士課程2年 前田 千明

- ◆学生寄稿 東北地方震災ボランティアツアーに参加して 5
保健科学コース 修士課程2年 齋藤麻里子

- ◆学生寄稿 基礎看護学実習を終えて 6
医学部保健学科 看護学専攻3年 蔵満 美奈

- ◆報告事項 7



医学部保健学科／大学院保健科学院・保健科学研究院のこれから

大学院保健科学研究院 研究院長補佐 宮本 顯二



大学院保健科学院も昨年4月から博士後期課程が立ち上がり、大学院大学北海道大学の正式な一員になることができました。しかし、一員になることと、認め

てもらおうためにはどうしたらよいのでしょうか。答えは優れた教育と研究をおこなうことにつきます。

教育をみてみましょう。個々の教員の教育内容を評価することは困難ですので、点数化されたもので比較してみます。例えば、北海道大学では優れた教育を行った教員を評価するシステムとしてエクセレント・ティーチャー制度があります。毎年、文系と理系それぞれ上位8～10名がエクセレント・ティーチャーとして選出されます。本学のホームページをみると、私たち研究院の教員は、平成18年度には理系9名中3名、平成19年度には8名中4名、平成20年度には10名中6名、平成21年度には8名中2名、平成22年度には8名中2名がエクセレント・ティーチャーに選ばれていました。いずれの年度も教員は重複していませんので、実に教員4人に1人がエクセレント・ティーチャーです。また、教員の授業内容・方法を改善し向上させるための組織的取り組み(Faculty Development)は毎年全学規模で行われていますが、平成20年度から保健学科・保健科学院でも独自に行うようになりました。例年学生が夏休みに入ってから行われ、平成22年度は教員の82%が参加しました。職種別国家試験の合格率をみると、平成22年度は保健師国家試験が96.4%(全国平均86.3%)、助産師100%(97.2%)、看護師100%(91.8%)、診療放射線技士90.2%(71.1%)、臨床検査技師88.1%(67.0%)、理学療法士100%(74.3%)、作業療法士84.2%(71.0%)と全国平均を大きく上回っています。また、視点を変えて学部学生の健康診断受診率をみると、保健学科は82%と全学平均の28%を大きく上回っています。どれをとっても他学部を圧倒しています。

それでは研究はどうでしょうか。手元にある本年5月発

行の保健科学研究院の年報をみると、英文原著は平成20年度が36編(教員1人あたり0.48編)、平成21年度が53編(0.76編)でした。この数字は他研究院・研究科に比べて決して多いとはいえません。しかも教員の出身部局との共著論文が少なくないのが現状です。しかし、大学院が設置されてからは筆頭著者あるいは責任著者が当研究院の教員で、かつ、研究の場が当研究院である原著論文が増加しています。競争的研究費取得状況は、平成20年度は59件(文部科学省科学研究費補助金37件)、平成21年度は72件(45件)で、21年度は教員1人あたり1件獲得していることとなります。また、従来は一律に配分されていた一般運営財源についても、英文原著論文1編につき10万円の助成(平成23年度からは上位の雑誌に掲載されるとさらに上乘せ)、大学院生の指導人数に応じて、研究・教育費の上乗せなど、研究活動を積極的にしている教員ほど一般運営財源が多く配分されるようになりました。大学院生とともに研究を行う環境が少しずつではありますが整ってきました。

さて、今後、教育の質を維持したまま研究のレベルをあげるにはどうしたらよいのでしょうか。私は講義内容の効率化と単位の実質化を推進することで講義数を減らし、その分を研究に向けるべきと考えています。その理由は教員数が他部局に比べて圧倒的に少ないために教員1人あたりの講義数が他学部比べて極めて多いからです。看護学専攻を例にとると学生数80名に対し教員数は28名です。薬学部は80名に対し56名、医学部医学科は105名に対し128名、歯学部は60名に対し90名、獣医学部は40名に対し47名と(いずれも附属病院の職員は含まない)、4年制と6年制の違いを考慮しても保健学科(保健科学研究院)の教員数が極めて少ないのは明らかです。大学院が設置されてからはさらに講義の負担が増えました。夜間開講の講義もあります。教員の定員削減も続いています。このような状況では講義の負担軽減を考えざるを得ないと思います。

来年度末には博士後期課程第一期修了生が誕生します。我々の指導力が問われます。

生活機能学分野 神経心理学・高次脳機能障害学研究グループ

生活機能学分野 准教授 境 信哉

神経心理学とは、脳の損傷によって生じるヒトの心理・行動学的な変化から、正常な脳の機能を推定していく学問であり、高次脳機能障害学は、そのような心理・行動学的変化を科学的に分析し、障害を有する人を支援していく学問です。我々のメンバーのほとんどは作業療法士であるため、主に臨床に直結した研究を行っています。

現メンバーは、大学院保健科学院に在籍する大学院生7名(博士後期課程2名、修士課程5名)とその指導教員である生活機能学分野の境(准教授)で構成されています。また、大学の内外を問わず、多くの専門家の支援を受けています。

以下に各メンバーの研究テーマをご紹介します。テーマは、大きく5つに分けられます。

■脳における背側視覚経路の機能と役割

DC1の桜庭さんは修士論文で「背側視覚経路の道具に対する情報処理—Continuous Flash Suppressionを用いた検討—」と題した研究を行い、背側視覚経路が道具カテゴリ情報を処理しているとする従来の学説を覆すことに成功しました。現在は、健康科学分野の横澤教授からのご指導を受け、脳磁図(MEG)を用いた検討も行っています。

■神経心理学的評価尺度の開発

DC1の澤村さんは修士論文で「Moss Attention Rating Scale日本語版の信頼性と妥当性の検討」と題した研究を行い、本尺度の有用性を示しました。北大病院リハビリテーション科の生駒教授からのご指導いただきました。MC2の吉田さんは現在修士論文で「作業課題版Flow尺度の開発—信頼性と妥当性の検討」と題した研究を行っています。将来的には、注意障害に対するリハビリテーションの効果研究でこの尺度を使用したいと考え



神経心理学・高次脳機能障害学研究グループ

ています。健康科学分野の山内准教授と法政大学の浅川教授(Flow研究の我が国の第一人者)からの指導も受けています。MC1の村川さんは、行動観察による病態失認の評価尺度の開発を目的とした研究を進めています。

■大脳性視覚障害児の視覚評価とリハビリテーションに関する研究

MC1の瀬尾さんは、脳損傷による視覚障害児の視覚機能を行動から予測する評価尺度の開発を目的とした研究を進めています。山形県立保健医療大学の平山教授(視覚神経心理学の我が国の第一人者)のご指導も受けています。

■脊髄性筋萎縮症(I型)児のコミュニケーション支援に関する研究

MC1の星さんは、脊髄性筋萎縮症(I型)児の発達マイルストーンの作成を研究テーマに選び、現在準備を進めています。SMA(脊髄性筋萎縮症)家族の会医療アドバイザー(言語聴覚士)で熊本保健科学大学の佐々木先生からの指導も受けています。

■高次脳機能障害者の社会生活に関する研究

MC1の村上さんは、社会生活障害と前頭葉機能の関連性について研究を進めています。また、我々は来年度から生活機能学分野内共同研究として高次機能障害者のドライビングに関する研究を開始する予定です。

研究グループとしては、まだ日が浅く、業績はほとんどありません。今後も多くの方々にご支援をいただきながら、国際的に発信できる研究活動を展開していきたいと思っています。



ゼミの様子

北斗関節機能障害予防学分野

兼任教授 武田 直樹・山中 正紀 特任助教 小林 巧

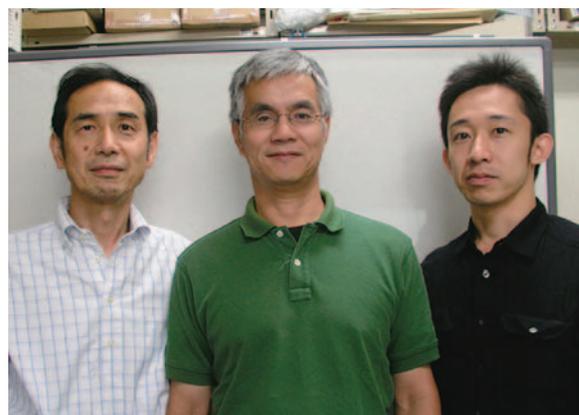
変形性関節症、腰痛症やスポーツ外傷(特に、靱帯損傷)などの疾病では関節機能障害や運動機能障害が生じ、ひいてはQOLの低下を招き生活機能障害の原因となる。急速に進もうとしている高齢化社会を迎えこの生活機能障害は益々大きな問題になってきている。現在はずでに起こった関節・運動機能障害に対して理学療法をはじめとするリハビリテーションが主に行われているが、さらに効果的で費用対効果の高いリハビリテーションを考えていくと、早期発見・早期治療あるいは疾病・障害予防のためのリハビリテーションに行きつく。そこで本寄附分野では、予防の観点から病態の成因、進行を解明し、効果的な理学療法等について研究を行うことを目的にしている。

変形性膝関節症の患者数は現在500万人から1000万人と言われており、さらなる発症原因の解明と予防対策が求められている。本疾患の発症と進行に関しては、加齢による軟骨にかかる力学的変化や軟骨自体の代謝・酵素の変化により、軟骨変性のきっかけが生じ、軟骨変性の進行と共に力学的負荷が増大し、これがさらに軟骨の変性を進める悪循環が形成されていると考えられる。軟骨変性が進行した後では、リハビリテーションの効果も十分でなく、手術治療などのハイコストの治療に頼らざるをえなくなる。軟骨変性の始まる早期よりその病態をとらえ、軟骨に改善をもたらすようなリハビリテーション介入が求められている。本寄附分野では、このような軟骨変性が始まる前や早期の患者を対象に、最新のMRI診断技術により早期に軟骨の変性を検出し、三次元動作解析システムにより膝にかかる力学的変化を検討し、変形性膝関節症の成因や進行の因子を明らかにして、有効で効率的なリハビリテーション介入に役立てようとするものである。

スポーツ医科学分野では靱帯損傷、特に最も多いスポーツ外傷である膝前十字靱帯(ACL)損傷と足関節捻挫といわれる足関節靱帯損傷の予防が注目されている。ACL損傷はアメリカにおいて年間約9万5千件、本邦においては年間約2~3万件発生し、今のところ再建術の有無にかかわらず、将来的に変形性関節症変化を招くともい

われている。従って、ACL損傷は重篤で、頻度が高く、費用がかかる外傷であり、ACL損傷予防は国際的にも重要と認識されている。一方、足関節靱帯損傷もACL損傷と同様に頻度が高く、費用がかかる外傷である。足関節内反捻挫の後遺症として慢性的な関節不安定性が生じ易く、再発率が高い。また、将来的には変形性足関節症の危険性があるといわれている。これらの疾患に対する予防として神経-筋トレーニングが重要といわれているが、どのようなトレーニングが効果的か、トレーニング頻度、トレーニング期間など明らかになっていない。これらを明らかにするにはスポーツ選手、一例としてACL損傷足関節靱帯損傷の多いバスケット選手などを対象にした研究が必要である。しかもその選手のレベルはパフォーマンスの高い全国レベルの選手が必要である。そのため本分野では学内に留まらず、地域にでてゆき地域病院やスポーツ選手との連携を密にとり、スポーツ障害の予防に向けた取り組みを続けてゆきたい。

本寄附分野では、予防という観点を取り入れた新しいリハビリテーションの分野を創出し、この分野においてさらに深いレベルでの研究と教育を実施していこうと考えています。



左から、武田直樹教授、山中正紀教授、小林 巧特任助教

南太平洋ソロモン諸島でのフィールド調査 —自分の目で見ることの大切さ—

保健科学コース 修士課程2年 前田 千明

■はじめに —ソロモン諸島について—

昨年2010年9月、修士課程1年次にソロモン諸島にフィールド調査に行ってきました。ソロモン諸島はオーストラリアの北東に位置し、大小約1,000を数える島から成る群島国家です。一番大きな島であるガダルカナル島には首都ホニアラがあります。昨年私は、この首都ホニアラ近郊の農村部を対象に、予備調査を行いました。村における滞在は約2週間という短い期間でしたが、村の人々と一緒に生活することによって信頼関係を築き、また先行研究と予備調査の結果を分析することでリサーチエッセンスを見つけることができました。以下2010年度の調査報告、そして今年2011年度の調査について報告させていただきます。

■2010年度、調査報告 —村での生活—

初めて訪れた太平洋の島国の村は、海のすぐ側にある緑豊かな村でした。日本の生活とは異なり村には水道や電気はありませんが、村人たちが優しくあったため、すぐに慣れることができました。女性でも安心して生活できるよう、細かな配慮をしてくださったことがとてもありがたかったです。異国の他人である自分に心暖かな対応をくださるのは、先生・先輩が長年にわたって村人と信頼関係を築いてきてくださったからだと思うと、調査は信頼関係の上で成り立っているのだと痛感しました。



村の様子：家は木と葉で作られている

■現地での調査を通して

村では修士論文の予備調査のため、村の住民に対して身体計測(身長・体重・上腕周囲長など)を行いました。子どもから大人まで193人のデータをとることが出来ました。過去の調査データとこのデータを解析して発見したことは、「この地域の女子は思春期(12歳頃)から急激に太

りだす」ということです。

途上国における深刻な問題として、近代化により食事やライフスタイルが西洋化し、その結果肥満者が増加していることが挙げられます。私が滞在した村でも食事は伝統食であるキャッサバ等のイモ類や野菜の他、コメやヌードルなどの輸入食と一緒に食べていました。そのため「どうすれば肥満化を予防できるか」という視点は地域住民の健康増進の点で非常に大切です。

その一方で途上国は衛生環境が整うスピードが遅く、マラリアなどの感染症が未だに残っている現状があります。ソロモン諸島をはじめとする太平洋地域では都市部も農村部も依然としてマラリアは深刻な問題です。

■2011年度の調査に向けて —私にできること—

私は今年度の本調査(7月末から約2ヶ月間)にあたり、なぜ思春期女子の体重が急増するのかという問題に取り組みたいと考えています。具体的には12歳前後の少女を対象として食事調査や身体活動量測定を行います。さらに、行動観察の調査から子どもの役割やライフスタイルの変化を観察したいと思います。仮説として、思春期を通して女性の役割の変化が起こり、それにともなって身体活動量が低下することが女子の肥満化の主な原因だと考えています。

調査ではただ測定して数値を得るのではなく、現地での生活様式や文化にも配慮した調査を行う予定です。現地に入らなければ見られないことを見る、百聞は一見に如かず、これがフィールドワークの醍醐味だと思います。

調査を目前に控え不安は尽きませんが、昨年度の経験を踏まえてフィールドワークを楽しむ気持ちで臨みたいと思っています。自分の研究によって村の子どもたちの健康に少しでも貢献できれば本望です。



村の子どもたち：いつも元気いっぱい!

東北地方震災ボランティアツアーに参加して

保健科学コース 修士課程2年 齋藤麻里子

6月17日から20日の4日間、札幌市社会福祉協議会が主催したボランティアツアーに参加しました。3月11日の東日本大震災で津波の被害にあった岩手県陸前高田市で、がれきの撤去を行いました。

■ボランティアツアーに参加した理由

3月11日以降、何かできることはないかと考えていました。できれば現地に行って活動したいと思い、インターネットで調べた結果、札幌市社会福祉協議会主催のボランティアツアーを見つけました。足手まといになるのではないか、と参加するかどうかとても悩みましたが、行かないと後悔するだろうと思い参加することにしました。

■ボランティア活動

ツアーの参加者は約40名で、20代から60代後半までさまざまな方がいました。苫小牧から青森までフェリーに乗り、陸前高田市のボランティアセンターまではバスで移動しました。ボランティアセンターまでの風景は、山間に瓦屋根の家と田畑が広がり、とてもきれいでした。しかし、ある場所から突然、がれきの山と壊れた建物が現れました。徐々に被害の跡が現れるのではなく、きれいなところから突然何も無いところになることに驚きました。テレビや新聞では何度も見ている光景ですが、実際に見ると強い衝撃を受けました。

活動は、2日間かけて3か所のがれきを撤去しました。大きいものはすでに重機によって脇によけられていました。しかし、大きなコンクリートの塊が転がっていたり、スコップで掘ると瓦やコンクリート、ガラスなどがたくさん出てきました。瓦などの大きいものは道路側によけ、ガラスの破片など小さいものは土嚢袋にいれていきました。ときには、土の中から手紙や写真、本や食器などが出てくることもあり、ガラスの破片などとは別に分けました。

作業は自然と分担されました。力のある人たちは、人の体くらいあるような大きいものや塀などの重いものをよけ、そうではない人は小さいものを拾いました。それぞれが無理をせずにできる範囲で行うことで、自然とバランスが取れました。また、自分一人では拾い上げられないものを見つけたときは、周囲の人に声をかけて手伝ってもらい

ました。休憩時にはお互いに声をかけあって、体調が悪くないか尋ねたり、飲み物や飴などをすすめたりしました。そのように、皆で力を合わせて活動を行うので、お互いに初対面だったのですが、時間が経つにつれ連帯感も生まれました。そして作業終了時には、一区画だけですが、きれいになったことと皆と一緒にやったのだという思いから達成感がありました。

■これから

今回、まだまだ手作業でなければ拾えないような小さいものがたくさん埋まっていることを知りました。おそらく、陸前高田市以外にも同じ状況だと思いますし、まだ人の手が入っていない場所もあると聞きました。ボランティアはまだ必要です。参加する前は足手まといにならないかと不安でしたが、できる範囲で作業したことで、少しですが役に立ったと思います。ぜひこれからもたくさんの方がボランティアとして活動することで、復興の力になればと思います。



陸前高田市にて



上の写真の場所から5分ほど登ったところにある神社からの風景

基礎看護学実習を終えて

医学部保健学科 看護学専攻3年 蔵満 美奈



6月6日から2週間、私たち看護学専攻3年生は初めての病院での実習となる基礎看護学実習を行いました。初めて体験する病棟の看護実践で一番感じたことは、看護が患者さんの人生そのものに深く関わる仕事だということでした。患者さんに接し、病気や闘病への不安や苦痛を抱えながらも、前を向こうとする患者さんを支え、患者さんにとっての生きる目標を共に考えるという看護師の仕事を目の当たりにしました。患者さんの人生の大きな決断の場面や、大切な場面に深く関わり、患者さんの決断を支え、寄り添うという看護の崇高さや難しさを実感しました。

重い病気を抱え、つらい告知を受け、治療の選択を迫られている患者さんと出会いました。私は、その患者さんの心情を思うと、どのように患者さんに声をかけていいのかかわからず、戸惑うばかりで、患者さんの気持ちを必死に想像し、考える毎日でした。そんな私に患者さんは、自分の人生の経験やたくさんの思い出を話してくださいました。それらの経験や価値観が、現在の患者さんの生活の様々な面に反映されていることが少しずつわかってきました。その中で、患者さんの日常の中の小さな楽しみを共有したり、療養過程の小さな目標達成をともに喜んだりさせていただき、患者さんが病気に対する思いや今後の考えを話して下さったことがありました。患者さんの病気のことや生活のことを一緒に考えていきたいという思いを少しは患者さんに伝えることができたのかもしれないと思います。心から嬉しく、看護の喜びを感じられた瞬間でした。そして、もっと看護師として患者さんのためにできることを考えたい、もっと私に何かできないだろうか強く感じま

した。

さらに、今まで大学の講義で学んできたことが現場の看護実践の場面で大切な基礎となることを実感し、そのつながりが実習に行って初めて見えてきました。講義が再開した今、病態の理解と看護ケアのつながりを意識しながら学習を続けていきたいと思います。今後は、常に変化する看護のニーズを敏感に感じ取れるように、社会情勢や国際事情に目を向け、看護の役割について考えていきたいと思っています。

また、共に実習に励んだ仲間達に支えられて、切磋琢磨し、成長し合いながら、初めての実習を有意義に終えることができました。改めて、共に学ぶ友人がいることの心強さを感じました。

最後に、今回の実習で、看護の場では、患者さんそれぞれの様々な人生経験や価値観に出会うことができ、自分の知らない世界観を患者さんから教えてもらうことができるのだと学びました。今回の実習での学びを生かし、患者さん一人ひとりの個性を大切にできるような看護を実践していけるように、これからも学んでいきたいと思っています。



看護学専攻の仲間と実習病院へ

サステナビリティ・ウィーク2011

北海道大学は持続可能な社会の実現に向け2007年から毎年サステナビリティ・ウィークを開催しております。保健科学研究院では今年も下記の2つの行事を企画しました。

多くの皆様の参加をお待ちしております。

企画名	健康を創る最先端技術と健康マネジメント
開催期間	10月16日(日) 13:30~16:30 (12:45受付開始)
主催者	大学院保健科学研究院
会場	大学院保健科学研究院 6階 会議室
行事概要	自らの健康は、自らが創りだす時代がきています。そのために、健康リスクを瞬時に把握し、疾病を予防する最先端計測技術と的確な健康情報ネットワークシステムが必要です。疾病や老化に関するストレスを血液中酸化脂質の測定で評価する液体クロマトグラフィー質量分析法、カーボンナノチューブ・センサーの研究を紹介します。これらの評価系を世界中で活用する仕組みづくりについても紹介します。さらに、薬局と大学を結び、産学官が連携した遠隔健康相談システムの可能性について技術面、運用面、政策面から議論するとともに、本実証実験を拡張した東日本大震災の被災支援についても報告します。
事前申し込み	不要
参加費	無料
問い合わせ先	保健科学研究院庶務担当 TEL: 011-706-3315 E-mail: shomu@hs.hokudai.ac.jp

企画名	ようこそ!ヘルスサイエンスの世界へ あの日からの復興ー保健科学の視点からー
開催期間	11月3日(木・祝) 13:00~16:00 (12:00受付開始)
主催者	大学院保健科学研究院公開講座委員会
会場	大学院保健科学研究院 3階 3-1講義室
行事概要	今回は震災からの復興を保健科学の立場から考えることとし、「あの日からの復興ー保健科学の視点からー」というサブタイトルをつけました。保健科学研究院の3名の講師陣が、サステナビリティ・ウィーク2011のテーマの一つである「健やかに人間らしく生きる」とこと震災からの復興をキーワードとして、保健科学の視点から詳しくかつ分かりやすく解説します。ご期待ください。 「放射線の人体への影響ー被ばくとリスクの考え方ー」 伊達 広行 教授 「被災地域の人々の健康を支えるケアー人々の絆と健康ー」 河原田まり子 教授 「被災地と北大を結んだ遠隔健康相談」 小笠原克彦 教授
事前申し込み	10月28日(金)までに下記問い合わせ先に、電話あるいはE-mailでお申し込みください。
参加費	無料
問い合わせ先	保健科学研究院庶務担当 TEL: 011-706-3315 E-mail: shomu@hs.hokudai.ac.jp

平成23年度(第5回)北海道大学医学部保健学科長賞表彰式を挙

平成23年9月15日(木), 保健学科会議室において「北海道大学医学部保健学科長賞」表彰式が行われ, 保健学科の教員が列席のもと, 小林保健学科長から被表彰者5名に, 賞状および記念品が贈呈されました。

この表彰は, 医学部保健学科4年次に在籍する学生で, 特に優秀な成績を修め, 他の学生の模範となると認められた方へ授与されるものです。

このたび下記の方々が表彰を受けられました。

看護学専攻	千葉 茉莉枝 さん
放射線技術科学専攻	相木 正 睦 さん
検査技術科学専攻	池下 隼 司 さん
理学療法学専攻	谷口 翔 平 さん
作業療法学専攻	工藤 梨 紗 さん



記念写真

平成23年度文部科学省科学研究費採択一覧

研究種目	新規 継続	分野・職名	氏名	研究課題
基盤研究(B)	継続	基盤看護学 准教授	林 裕子	生理学に基づいた意識障害患者への看護プログラムの構築
	継続	健康科学 教授	齋藤 健	高次神経活動の制御に係わる必須微量元素動態の解明
基盤研究(C)	継続	基盤看護学 教授	良村 貞子	医師の事前指示に基づく看護職者の薬剤管理における裁量と法的責任
	継続	基盤看護学 准教授	鷺見 尚己	がん患者の在宅療養に向けた看護者間のネットワークシステムの構築
	継続	基盤看護学 准教授	矢野 理香	脳血管障害患者を対象とした手浴ケアモデルの検証
	継続	基盤看護学 准教授	大槻 美佳	多発性硬化症の高次脳機能検査：日本語版作成と臨床応用
	継続	創成看護学 教授	佐伯 和子	保健師学生が政策に関する基礎的能力を獲得するための効果的な教育カリキュラムの開発
	継続	医用生体理工学 教授	山本 徹	賦活領域の微細構造解析
	継続	医用生体理工学 教授	伊達 広行	放射線被曝影響解析に向けた線量付与の統計的モデルの構築
	継続	病態解析学 教授	山口 博之	肺炎クラミジアの感染細胞内での生存・増殖様式を決定づける宿主応答と分子基盤の解明
	継続	病態解析学 助教	吉田 繁	皮膚癌の免疫監視回避機構の解析と臨床検査への応用
	継続	機能回復学 准教授	浅賀 忠義	姿勢制御における筋シナジーと運動学習に関する研究
	継続	健康科学 特任准教授	恵 淑萍	メタボリックシンドロームにおける血漿過酸化脂質代謝の研究
	新規	基盤看護学 准教授	岩本 幹子	医療系大学院におけるインタープロフェッション教育プログラムの構築と評価
	新規	基盤看護学 講師	青柳 道子	がん患者の配偶者が受けるソーシャルサポート—尺度開発と精神的健康との関係—
	新規	基盤看護学 助教	高山 望	高次脳機能障害患者を支える主介護者の退院時指導プログラムの構築
	新規	創成看護学 教授	佐藤 洋子	小児医療における子どもの意思決定と看護支援に関する基礎的研究
	新規	創成看護学 准教授	安積 陽子	早産で生まれた子どもへのスリープマネジメントによる睡眠習慣確立プログラムの構築
新規	創成看護学 助教	進藤ゆかり	オピオイド鎮痛薬を使用している難治性非癌性疼痛患者の慢性疼痛との共存の課程	

研究種目	新規 継続	分野・職名	氏名	研究課題
基盤研究(C)	新規	機能回復学 教授	福島 順子	片麻痺患者に対するイメージ訓練の有効性とその脳内機構－機能的磁気共鳴画像－
	新規	生活機能学 教授	傳田 健三	児童・青年期の双極性障害に関する臨床的、疫学的研究
	新規	生活機能学 准教授	境 信哉	重度心身障害を伴う大脳性視覚障害児・者を対象とした視覚行動評価尺度の開発
	新規	生活機能学 客員研究員	藤川 恵子	高眼圧性RGC障害新規評価系の開発：緑内障疾患モデルVavマウスを用いた研究
	新規	健康科学 教授	小笠原克彦	GISに組み込んだシステム・ダイナミクスによる医療環境の予測と可視化
	新規	健康科学 教授	千葉 仁志	全リポ蛋白質粒子の粒子径と疎水性に関するデータベースの作製
	新規	健康科学 特任助教	武田 晴治	一粒子レベルでのリポ蛋白質酸化状態解析
	新規	脳機能画像学 特任准教授	宮本 環	バイオリジカルモーションと背景視野は脳内で統合されるのか？臨床応用への基礎的検討
新学術(領域)	新規	健康科学 准教授	山内 太郎	狩猟採集民の身体とフィットネス：「遊び」と「食」からみた子どもの環境適応能
挑戦萌芽	継続	基盤看護学 准教授	宮島 直子	高齢者の精神機能を高める看護コミュニケーション・スキルの開発
	継続	健康科学 教授	齋藤 健	環境汚染化学物質による中枢神経系に対する影響の多角的評価法の構築
若手研究(B)	継続	創成看護学 講師	平野美千代	効果的な介護予防ケアの推進に向けた要支援前期高齢女性の社会活動尺度の開発
	継続	創成看護学 助教	荻田 珠江	病院・診療所における産婦の主体的な出産を達成する助産ケアとその特殊性
	継続	医用生体理工学 助教	堤 香織	放射線を生残した腫瘍細胞におけるニューロピリンの機能解析
	継続	機能回復学 助教	齊藤 展士	運動学習に影響を及ぼす姿勢制御の学習メカニズムの解明
	継続	機能回復学 助教	笠原 敏史	随意的連続運動課題時の運動制御と筋の特性についての研究
	新規	基盤看護学 助教	渡辺 玲奈	総合周産期母子医療センターの安全性を保證した施設計画ガイドラインの開発
	新規	創成看護学 助教	本田 光	子育て世代における「地域とつながる力」の概念構築
研究活動 スタート支援	継続	基盤看護学 助教	下田 智子	食道がん術後食プロトコール導入による栄養状態の検討
特別研究員 奨励費	継続	博士後期課程 2年	田村 彰吾	脳由来神経栄養因子(BDNF)の循環血液中における存在様式の解明
	新規	博士後期課程 2年	櫻井 俊宏	トリグリセリド代謝異常に適した新しい酸化ストレスマーカーの開発

保健科学研究院研究助成制度対象者(平成23年2月～平成23年9月)

分 野	職 名	氏 名	備 考
創成看護学	講師	平野美千代	
医用生体理工学	教授	西岡 健	2編
病態解析学	教授	石津 明洋	2編
機能回復学	助教	寒川 美奈	2編
健康科学	教授	千葉 仁志	
病態解析学	教授	山口 博之	2編 内1編20%以内 ※2
機能回復学	准教授	浅賀 忠義	2編
医用生体理工学	教授	伊達 広行	
病態解析学	教授	森山 隆則	
機能回復学	助教	笠原 敏史	
病態解析学	助教	松尾 淳司	20%以内 ※2
健康科学	准教授	山内 太郎	
病態解析学	教授	三神 大世	2編

※ 研究助成制度

対 象： (1) 英文原著論文(査読有, IF有, first author)を執筆した教員

(2) 英文原著論文(査読有, IF有)のcorresponding authorとなった教員

(ただし, (1)に該当する論文のcorresponding authorとなった教員は除く)

助成の方法： 論文1編につき10万円の研究費を対象教員に配分

※1 掲載雑誌のランキングが当該カテゴリーにおいて上位10%以内は20万円を追加配分

※2 掲載雑誌のランキングが当該カテゴリーにおいて上位20%以内は10万円を追加配分

研究助成採択状況(平成23年1月～平成23年7月)

所属・氏名	財団等名称	種 目	題 目
博士後期課程2年 林 泰弘	日本科学協会	平成23年度 笹川科学研究助成	難培養性細菌が持続的に感染する株化アメーバを用いた新規共生基盤の検索:細菌の共生がアメーバの運動能に与える影響とその分子修飾機構の解明
博士後期課程2年 林 泰弘	大山健康財団	小規模研究会等の 集会助成	難培養性細菌の共生がアメーバの運動能に与える影響とその分子修飾機構の解明
博士後期課程2年 林 泰弘	伊藤医薬学術 交流財団	第17回伊藤財団 海外学会等 出席研究交流助成	パラクラミアの付着・増殖機構の分析
病態解析学分野 教授 石津 明洋	伊藤医薬学術 交流財団	第17回伊藤財団 海外学会等 出席研究交流助成	自己血管内皮細胞反応性T細胞による血管炎発症モデル
創成看護学分野 助教 本田 光	日本科学協会	平成23年度 海外発表促進助成	乳児全戸家庭訪問事業に対する母親の満足感と訪問者との関係
健康科学分野 准教授 山内 太郎	日本学生支援機構	平成23年度留学生 交流支援制度 (ショートビジット)	途上国の子どもの健康に関するフィールド調査 ー現地大学生・地域住民との協働

受賞状況(平成23年1月～平成23年7月)

所属・氏名	受賞・表彰名称等	受賞論文名・研究題目・受賞理由等
健康科学分野 教授 齋藤 健	ビル管理教育センター創立40周年記念 特別会長表彰・要請事業功労者表彰	建築物環境衛生管理技術者等の養成における貢献
健康科学分野 特任准教授 恵 淑萍	2011年度臨床化学会学術賞	過酸化脂質及び抗酸化脂質に関する研究
修士課程2年 萩野 泉	日本アフリカ学会第48回 学術大会ポスター発表最優秀賞	カメルーン南東部に暮らすピグミー系狩猟採集民の 子どもの思春期スパートと栄養状態
修士課程修了生 横岡 由姫	第67回日本放射線技術学会総会 学術大会Cypos賞銀賞	X線撮影検査オントロジーのためにAnalytic Hierarchy Processを用いた診断可否の判断の明 示化
修士課程修了生 宮田 孝子 他	第2回日韓地域看護学会共同 学術集会ポスター賞	Support Groups for Families Living with Persons who Suffered from Traumatic Brain Injury: Activitis of a Japanese Public Health Center

絵画・版画の寄贈について

このたび、故 ^{ながの}長野 ^{のぼる}襄(1909～1998)氏のご遺族より、絵画「風景」をご寄贈いただきました。

長野氏は、昭和11(1936)年に金沢医科大学附属薬学専門部(現 金沢大学薬学部)を卒業後、昭和15年より北海道社会事業協会岩内病院に薬剤師として勤務の傍ら、絵画、俳画、俳句などの芸術活動にも才能を発揮されました。昭和30年岩内美術協会創立に参加し、翌年全道展に初入選、昭和56年全道展<会員>に推挙されました。

また、昭和29年に北海道薬剤師会より「薬事功労者」として表彰を受け、昭和53年に岩内町より「社会功労賞」、平成5年には岩内文化団体協議会より「文化賞」を授与されています。

寄贈絵画は平成2年全道展第45回展の出品作です。



絵画「風景」F50:保健科学研究院会議室(6階)に展示

また、本年3月に定年退職されました松野一彦名誉教授(前 医学部保健学科長・病態解析学分野教授)から、版画「氷点下30度」(作:栗谷川健一(1911～1999)氏)をご寄贈いただきました。



保健科学研究院長室に飾られた版画「氷点下30度」とともに
小林保健科学研究院長(左)と松野名誉教授(右)

人事異動

平成23年3月31日

(定年)	松野 一彦	病態解析学分野教授
(辞職)	村上 新治	基盤看護学分野教授
	清水 匡	医用生体理工学分野教授
	平塚 志保	創成看護学分野准教授
	片丸 美恵	基盤看護学分野助教

平成23年4月1日

(採用)	大槻 美佳	基盤看護学分野准教授
	安積 陽子	創成看護学分野准教授
	政氏 伸夫	病態解析学分野准教授
	進藤 ゆかり	創成看護学分野助教
(昇任)	河原田まり子	創成看護学分野教授(創成看護学分野准教授)
	矢野 理香	基盤看護学分野准教授(基盤看護学分野講師)
	平野 美千代	創成看護学分野講師(創成看護学分野助教)
	松岡 典子	医学系事務部保健科学研究所事務課長(医学系事務部総務課長補佐)
	佐々木えり子	医学系事務部保健科学研究所事務課主任(医学系事務部総務課係員)
(転入)	神島 保	医用生体理工学分野教授(北海道大学病院講師)
	塚本 美奈	基盤看護学分野助教(北海道大学病院看護師)
	熊坂 浩	医学系事務部保健科学研究所事務課係長(帯広畜産大学総務課厚生係長)
	松野 とも子	医学系事務部保健科学研究所図書担当(附属図書館管理課図書受入担当)
(転出)	久保 直樹	アイソトープ総合センター准教授(医用生体理工学分野助教)
	吉田 直美	北海道大学病院医事課課長補佐(医学系事務部総務課係長)
	中島 香寿美	医学系事務部総務課大学院教務担当(医学系事務部総務課保健科学研究所教務担当)
	山家 尚子	農学事務部図書担当(医学系事務部保健科学研究所図書担当)

平成23年4月18日

(採用)	岡田 忍	医学系事務部保健科学研究所事務課事務補助員
------	------	-----------------------

平成23年5月1日

(採用)	小林 巧	北斗関節機能障害予防学分野特任助教
------	------	-------------------

平成23年7月31日

(辞職)	岡田 忍	医学系事務部保健科学研究所事務課事務補助員
------	------	-----------------------

平成23年8月1日

(採用)	村上 好美	医学系事務部保健科学研究所事務課事務補助員
------	-------	-----------------------



広報誌の名称 「プラテュス」の由来

保健科学研究院の玄関前には、大きな二本のプラタナスの樹があります。古代ギリシャの医者ヒポクラテスは、プラタナスの木陰で弟子たちに医学を説いたそうです。大きな広い葉をもつプラタナスは、ギリシャ語で「広い」を意味する platys(プラテュス、ギリシャ語では「πλατύς」と記す)に、その名が由来するとされています。本研究院が幅広い分野の専門家の集まりであることから、このプラタナスの語源になぞらえて「プラテュス」と命名しました。

広報室 (編集委員)

伊達 広行(広報室長)
大槻 美佳
小野塚久夫
高橋 光彦
境 信哉
横澤 宏一
山内 太郎
渡辺 玲奈
菊池 洋美(事務)

発行 北海道大学大学院保健科学研究院広報室
〒060-0812 札幌市北区北12条西5丁目
連絡先 庶務担当
電話 011-706-3315
E-mail shomu@hs.hokudai.ac.jp
URL <http://www.hs.hokudai.ac.jp>